金融システム研究フォーラム　概要

第 33 回　2010.10.08（金）

今回は、大日方隆さんをはじめとする 5 名の会計学者においでいただき、”Accounting Alchemy”と題する論文およびそれに対する厳しいコメントをめぐって報告を受けて討議した。会計情報の relevance、資本市場の効率性に関わるものであり、大日方さんに如何ですかとお願いしたところ、こういう論点に関して経済学者の皆さんとの意見交換は大歓迎ですとして商談成立し、会計学の側からも 5 名の方々が参加された。ちなみに、ご参加いただいたのは、会計情報の relevance、資本市場の効率性などの論点に関心が深く、しかも実証研究を重視される方々であり、典型的な会計学者だというわけではない、というのが議事録作成者の理解である。

この論文は、Wharton School (University of Pennsylvania)の professor Robert Verrecchia が 2009 年 6 月の BIS Conference on “Financial system and macroeconomic resilience: revisited”で報告したものの改訂版(March 2010, BIS Working Papers No.302)である。Discussant の一人であった professor Mary E. Barth (Stanford University Graduate School of Business)の”Perspectives on accounting alchemy”も同 Working Paper の末尾に収録されている。

採用会計原則の変更、さらに許される会計ルール自体の変更により報告される数字が変化し、それをめぐって株価が変動する・・・ように見える。加えて、昨今の会計基準をめぐる国際的な攻防に関する新聞報道などを眺め続けて、市場は効率的じゃあ・・・なかったのか、という漠然とした感想を日頃から抱くメンバーが少なくなかった。著名な会計学者が BIS Conference で報告したこの論文のタイトルを見て、取り上げて話題にすることになった。

秋葉さんと米山さんが分担して当日用意された資料（ダウンロードできるようになっている）をご覧いただこう。論文執筆者とコメント担当者の間に激しい対立があるが、この論文の内容とコメント担当者の批判の内容の双方に対する報告者の評価は、はなはだ低調であった。「タイトルに惑わされて取り上げることになり、担当することになったが・・・」という気分のようであり、会計学サイドの参加者の評価にバラツキはほとんどないようであった。経済学サイドからもいろいろと質問が出たが、「なあんだ・・・」という反応で終わることが多かった。「BIS Conference の報告論文はもっとよい内容のものではないのですか？」と会計学サイドから問われて、答えに窮して「さあ・・・」と苦笑した。

議論は、会計情報の relevance、資本市場の効率性などの論点に関する会計学分野の実証

研究の方法と内容に向けられ、活発な意見交換が行われた。日頃の交流の状況を反映して、即座に実質的成果が上がる状況ではないが、その必要性に関する認識は進行したはずである。

関心を抱いても読むことが困難であり食欲もなかなかわかない類の論文である。要領よく紹介し、フォーラムでの議論に積極的に参加していただいた会計学者の皆さんに深謝します。